

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：34312

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02278

研究課題名(和文) 言説闘争としての日本近代詩史を再編する昭和期モダニズム出版物の研究

研究課題名(英文) Study of modernism publications in the Showa era to reorganize Japanese modern history

研究代表者

長沼 光彦 (NAGANUMA, Mitsuhiro)

京都ノートルダム女子大学・人間文化学部・准教授

研究者番号：70460699

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：春山行夫に代表される昭和期のモダニズムは、海外の芸術思想を引用して、独自の詩論を創り出す。それらの引用には、意図的なものと無意識のものがある。意図的には、ロシア未来派やフランスの純粋詩など、海外の新しい思潮が引用された。無意識には、同時期のマルクス主義と、同時代の歴史認識という文脈で接点を持った。モダニズムとマルクス主義は、表面的に対立したが、同時代文脈で共通する面があった。また、日本のモダニズムは、大衆文化と接点を持った。モダニズムと思想を共有する商業美術が、大衆と芸術を結ぶ理論を構築した。商業美術は、マルクス主義芸術と接点を持つ。本研究は、モダニズムに関わる複合的な引用関係を調査した。

研究成果の概要(英文)：Modernism in the Showa period cites the foreign artistic thought and creates its own poetry. These citations are intentionally made and those made unconsciously. In the case of intention, new overseas trends such as Russian & middot; avant-garde, France's pure poems were cited. In the case of unconsciousness, Japanese modernism shared about historical recognition with Marxism at the same time. Modernism and Marxism were conflicting superficially, but in the contemporary context there was a common aspect. Also, modernism in Japan has a point of contact with popular culture. Commercial art that shares thought with modernism built a theory connecting the masses with art. Commercial art has a point of contact with Marxist art. This research is a study of complex citation related to modernism.

研究分野：日本近代文学

 キーワード：日本近代詩 日本近代文学 昭和文学 モダニズム 間テクスト性 マルクス主義 商業美術 ロシア
・アヴァンギャルド

1. 研究開始当初の背景

(1)昭和期におけるモダニズム詩派の特徴として「主知」という語が挙げられる。詩作の意識化や理論の構築を重んじた態度を、阿部知二『主知的文学論』(1930)の用語に代表させたものだ。その主知的態度は、詩形式の改革を目指すと共に、モダニズムの正当性を主張する詩史の再編に向けられていた。その再編の戦略に注目するのが、本研究である。

(2)モダニズム詩派の代表とされる春山行夫は、在来詩壇を歴史上の過去へと追いやり、現代の動向に呼応したモダニズムを、「新しい時代の思想」が体现された運動と位置づける。その戦略は、諸言説の抽出と接続という思考手段に基づいている。これを間テクスト的手法(クリステヴァ『セメイオチケ』1969)と位置づけ注目するのが、本研究である。

(3)モダニズム詩の難解な形式は、文献参照を求める主知的態度と相俟って、知的エリート層の専有と見なされた。一方でモダニズムは、昭和期の大衆社会を背景に、映画やファッションなど多様な文化メディアで複製され拡散する運動でもあった。モダニズムの内部には、矛盾するベクトルが併存したのだ。このモダニズムの矛盾した多面的展開に注目するのが、本研究である。

2. 研究の目的

(1)詩史を種々の言説の引用からなる間テクスト的連関の場と位置づける。特にモダニズムの詩派の提示する詩史を、言説が意図的に編集されたコラージュと見て、その言説連関の全体像を調査する。

(2)詩史の編成は、モダニズム詩派の特権ではない。同時期には、詩壇に複数の詩史が登場し、相互に引用と対立の連関を生み出していた。これら詩史を提示する言説同士の類似と差異を調査する。

(3)詩史をめぐる言説同士の関係は、複合的な間テクスト的連関を構成する。また、モダニズムは、文学以外のジャンルに拡散している。多様なモダニズムイメージと詩史との関係を調べ、より複合的かつ全体的な同時代文脈の、間テクスト的連関の総体を明らかにして、可視化する。

3. 研究の方法

(1)本研究の主たる方法は、文献調査による。ただし、対象となる資料は膨大であるため、初めは、調査対象をしぼりこんだ。対象とした資料より、キーワードとなり得る語を抽出し、その間テクスト的連関を、他の資料の調査により探索することになった。まずは、モダニズム詩派でキーワードとなった、「自由詩」「散文詩」「純粹詩」などの、間テクスト的連関を調査し、海外芸術思潮の動向、日本国内の商業美術、プロレタリア思想、モダニズムの大衆化された文化表象へと、調査対象を広げた。

(2)収集した資料は、ブログなどインターネ

ット上での公開による情報提供を行い、大学OPACを通じて、公開し、公共の利用に供することを旨とした。ネットワークを通じた、情報交流を行い、研究の進展を図る目的である。

(3)モダニズム詩派の諸言説を結びつける間テクスト的手法を調査し、可視化する方法を検討する。複合的な引用と間テクスト的連関は、直線で結ばれるものではないため、論文形式だけでは表現しにくい。調査の過程で明らかになった間テクスト的連関を、パスマインダー、ハイパーテキストなどの概念を参照しながら、表現形式を検討する。

4. 研究成果

(1)昭和期モダニズムに関わる要素のひとつ、商業美術について調査した。商業美術は、濱田増治等により大正15(1926)年4月に結成された、商業美術家協会が提言する造語である。現代で言う商業デザインの領域を指す用語だが、単に美術を商業利用するのではなく、現代美術として積極的な意義が見出されていた。

「商業美術家協会設立趣意」(1926.4)には、商業美術の特徴について、現代の産業及び大衆と結びつき、公共の場に設置され、かつ、商品の魅力を伝えるため実効的な効果が求められる、と述べられている。商業美術以前の芸術を、個人が贅沢を求めるブルジョア芸術として批判し、逆に、商業美術を、大衆に開かれ、その生活の維持に必要な生産行為を目的とする芸術として位置づける。

その思想的背景には、同時期の民衆思想、社会主義、構成主義があり、同時代のモダニズムと思想的基盤を共有している。また、モダニズムの志向である、形式の重視、大衆性、運動と速度、といった要素が、商業美術の表現には含まれている。商業美術において、これらの表現は主として視覚的効果の上に表されている。

文学ジャンルでその視覚的表現は、書物装丁に反映されている。書物装丁は大衆に広く届けられる商業美術の一例として位置づけられるのである。そのため濱田増治は、同時期に出版され、粗悪な大量生産として批判された円本を、大衆に届ける実効的な効用において、肯定的に捉えている。このような発想が、従来文学ジャンルで活躍していた装丁家に反映する例も見られ、恩地孝四郎はその一人である。

これらの成果の一部は論文「昭和初期の書物装丁を支えた美意識 円本・限定本・商業美術」(『京都ノートルダム女子大学研究紀要』第46号、2016.3)として発表した。

この成果により、モダニズムと大衆性、および、後のプロレタリア文学との間テクスト的連関を明らかにすることができた。純文学および大衆文学という語により、文学を大衆性から切り離そうとする思潮がある一方で、大衆性こそが芸術の価値であるとする思潮が存在したのである。さらに、商業美術におい

て、その大衆性は、経済活動と結びつけて肯定されていることに注目しておきたい。文学の波及効果は、経済活動と効果的に結びつくことにより進められるという考え方である。文学史を検討する際に、文学、経済、大衆性が結びつけられる、大正末期から昭和初期にかけての文化文脈のひとつとして、考慮にいれるべきものである。

また、大衆化を目指した装幀を支える美術理念など、文学と美術との接点、および、文学の美術化について、新しい知見を提供することができた。近年の日本近代文学研究では、文学の内容や思想だけでなく、挿絵など、視覚的、美術的な要素に対する研究が登場している。そこに、今回の研究のような、装幀の美術的かつ商業的な視点を加えることで、文学史および文学概念の再検討に役立つことと思われる。

さらに、商業美術については、文化文脈における間テクスト的連関の研究を進める余地が多く残されている。ゆまに書房より復刻されている『現代商業美術全集』(アルス)以外にも、探索の進んでいない資料が残されていると思われるので、調査を続けたい。

(2) 日本近代文学のモダニズム研究で、必ず名前があがる春山行夫について、その著作に表れる用語や文献について調査し、具体的な文脈を明らかにした。特に、春山行夫が参照した、大正末から昭和初期の美術評論との関係を見出すことができた。

具体的には、春山行夫「日本近代象徴主義の終焉」(『詩と詩論』第一冊、1928.9)に表れる「Cubi-symbolisme」「Ego-symbolisme」という用語は、従来の研究で春山の造語と見なされていたが、昇曙夢『新ロシア文学の曙光期』(新潮社、1924.10)のロシア未来派の記述を参照したことがわかった。

『新ロシア文学の曙光期』では、ロシアの未来派として「自我未来派(エゴ・フューチュリズム)」と「立体未来派(クボ・フューチュリズム)」があげられている。『新ロシア文学の曙光期』は、春山行夫「純粹詩とフォルマリズム」(『世界新興芸術派叢書 現代詩講座 第三巻』金星堂、1929.12)に参考文献としてあげられている。

また、春山行夫が使う「純粹詩」という言葉は、元はヴァレリーをふまえるものでありながら、原一郎『現代詩の諸問題』(興文社、1939.7)のように、同時期の文学者に理解されていない例もあった。それだけ「純粹」という語の同時代文脈での用例は広く、一定の理解を得ていたわけではなかったのである。さらに、春山行夫自身が同時代の文脈の影響を受けて、ヴァレリーの用例から含意を広げて、シュルレアリスムへ接続させている面があることもわかった。

この成果の一部は、論文「春山行夫と純粹詩」(『京都ノートルダム女子大学研究紀要』第47号、2017.3)として発表した。

これらの成果により、造語と見なされ研究が停滞していた、春山行夫の間テクスト的手法の広がりやを明らかにすることができた。特にロシア・アヴァンギャルドとモダニズムとの関係については、横光利一など他の作家と関わりが研究されており、研究の進展が期待できる。

ロシア美術は、先の商業美術と関連する領域でもある。昭和期モダニズムの複合的な間テクスト的連関を調べるには、欠かせない領域であることを改めて確認した。例えば、日本で早期に話題となった芸術の「純粹」概念は、ロシアの抽象芸術の紹介に端を発している。昭和期に盛んに議論された概念を調査する場合には、それ以前に契機を探る必要があることもあらためて確認した。

また従来の研究では、モダニズム詩、特に春山行夫は、時代の徒花のように評価される場合があった。春山行夫の評論が、海外思潮のつぎはぎされた引用であると考えられ、それゆえに、その創作した詩が、海外モダニズムの表面的な模倣と考えられたからである。

しかし、この春山行夫の方法を、佐藤健一「厚生閣書店と春山行夫の戦略」(『都市モダニズムの奔流』1996)は、メディアにより言説を組織する編集者の立場を利用した戦略だと思われ、さらに、編集という作業を、諸言説の抽出と接続という思考手段として読み替え(松岡正剛『編集工学』2001)れば、つぎはぎこそが、春山行夫の創造性であると評価できる。実際に、従来の研究で、ロシア美術との関連は、見過ごされてきた。本研究の成果は、春山行夫を、海外思潮の編集、再構築の手法を用いた人物として再評価する契機となり得るだろう。

(3) プロレタリア文学は、日本近代文学史上で通例、モダニズム文学の系列に入れられることはない。しかし、歴史的な時間認識をふまえた理論を展開する点では、共通していることが、文献調査により明らかになった。

昭和初期に、モダニズム文学、プロレタリア文学は共に、歴史的な視点から現在を批判し、未来を志向する理論を展開している。モダニズム文学は、その名のとおり、現在を表象しようとする文学だが、最新のモードとしての現在、近い未来を先取りした現在を表象するものである。したがって、それまで有力だった思想を批判し、自らを新しい思想(エスプリヌーボー)として位置づけようとする。

一方、プロレタリア文学は、現在のブルジョア社会を否定し、来るべきプロレタリアの革命社会を目指す思想に基づく。プロレタリア社会は、いまだ実現しない体制であるため、その批評は、現状の批判に注力する。ブルジョア社会の欠陥を指摘し、その対極に、プロレタリア社会の理想を示すのである。

いずれも、歴史認識を批評に基盤にするのだが、過去を検証するだけでなく、未来を構築することを目指すのである。プロレタリア文学側は、モダニズム文学をブルジョア文学として位置づけたため、議論の上では対立した。だが、両者ともに、歴史的認識に基づき未来を志向する点で共通している。

その背景には、当時の歴史的思潮が、過去をふまえて現在を見直し、未来に寄与する、という思考を共有していた事実がある。理論に説得性を持たせるためには、モダニズム文学も、プロレタリア文学も共に、共有される同時代思潮をふまえる必然があったのだ。

以上のような研究成果の一部を、論文「小宮山明敏と同時代文学」(『京都ノートルダム女子大学研究紀要第48号』、2018.3)として発表した。特にプロレタリア文学側の、歴史認識を調査したものである。

小宮山明敏は、プロレタリア文学理論家の中でも特に、具体的な歴史記述を志し、ブルジョア文学の特質を積極的に分析した。小宮山明敏の評論を収録した唯一の著書『文学革命の前哨』(世界社、1930.9)には、1925年から1930年に発表された批評が収録されている。小宮山明敏は、1931年に亡くなったため、自著は一冊のみ残された。その批評は、プロレタリア文学批評の立場から、当時文壇に登場した「新感覚派」や「新芸術派」のブルジョア文学としての限界を指摘し、プロレタリア芸術運動の動向や作品の価値を評したものだ。

ブルジョア文学批判の根拠となったのが、その歴史観の欠如である。批判の背景には、プロレタリア文学派が参照した、フリーチェの提唱する「芸術社会学」があった。フリーチェは、ヨーロッパに登場した芸術を具体的に調査し、社会的条件との関係により生産される構造を分析した。ブルジョア文学には、このような社会構造をふまえた歴史観が欠けているとして批判したのだ。小宮山明敏は、ブルジョア文学とプロレタリア文学の歴史観の差違を、社会的関係に対する視点の有無に求めている。社会への視点を欠き、内面に閉じこもるのがブルジョア文学の特徴だとするのである。

ただし、先に示した春山行夫も、旧来の文学思潮に対し同様の論調で、批判を行っている。「自我未来派(エゴ・フューチュリズム)」は、内面に閉じこもったが、「立体未来派(クボ・フューチュリズム)」は、外形、表現に着目することで、内向する危険を回避したというのである。

プロレタリア文学、モダニズム文学共に、内向する芸術を批判し、その外側に向かう志向では、共通する面もあったのである。小宮山明敏は、表現主義や形式主義を批判したが、内面の外側に向かうモダニズム文学を評価することはなかった。ただし、プ

ロレタリア文学、モダニズム文学は両者共に、ロシア・アヴァンギャルドと接点を持つため、同様の志向を持つのである。

このような同時代文脈を明らかにすることで、同じ昭和初期の文化文脈を淵源とするプロレタリア文学とモダニズム文学との接点を見出すことができた。

過去の研究では、プロレタリア文学は、社会改革の思想として、芸術的価値が低いものとして、定型的に論じられてきた傾向がある。ただし、プロレタリア文学は、文学、芸術の概念自体を変革しようとする運動である。その内実を問わずに、定型的に論じる姿勢は、プロレタリア文学派が批判した、ブルジョア文学の芸術尊重の姿勢と変わらないものとなる。

本研究の同時代文脈をふまえた視点を、さらに推し進めることにより、プロレタリア文学の定義する芸術を再評価することに、つなげられるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

長沼光彦、小宮山明敏と同時代文学、京都ノートルダム女子大学研究紀要、査読無、48号、2018、127-138

<http://id.nii.ac.jp/1057/00000193/>

長沼光彦、春山行夫と純粹詩、京都ノートルダム女子大学研究紀要、査読無、47号、2017、78-90

<http://id.nii.ac.jp/1057/00000221/>

長沼光彦、昭和初期の書物装丁を支えた美意識 円本・限定本・商業匠術、京都ノートルダム女子大学研究紀要、査読無、46号、2016、67-78

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：

種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

ブログ「詩の本+」

<https://blog.goo.ne.jp/poegy>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長沼 光彦 (NAGANUMA, Mitsuhiko)

京都ノートルダム女子大学・人間文化学

部・准教授

研究者番号：70460699

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()